

## 11 小学校におけるプリシード・パートから抽出された強化因子に基づく歯科保健指導の効果

○幸田 奈美, 本間 和代, 木暮 ミカ<sup>1</sup>, 和田麻衣子, 佐藤 裕子

(歯科衛生士学科, <sup>1</sup>歯科技工士学科)

【はじめに】従来の小学校における歯科保健指導は、児童に対し一方的に知識、技術を与える方法が主流であった。今回、真砂小学校における歯科保健指導を実施するにあたり、プリシード・パートから強化因子を抽出し、それに基づいて適切と思われる講話、実習を取り入れた。その効果を知るため、実習前・後にアンケートを行い、児童の歯の大切さおよびう蝕に対する意識・理解の変化について調べた。

【方法】①対象：新潟市立真砂小学校2・4・5年生の計219名 ②時期：平成17年11月30日 ③ヘルスプロモーションの方針決定 ④歯科衛生実施内容：実習前アンケート→講話→歯の汚れの染め出し→自己歯みがき→磨き残しチェック→個別指導→実習後アンケートの順で行った。

【結果】2年生実習前の「6歳臼歯の大切さ」の理解度は、30.9%と低かったが実習後は、98.6%まで向上した。4年生の「虫歯とおやつ」では70.6%から93.4%、「5年生

の虫歯と歯並び」では42.5%から85.0%の児童が理解したと回答した。しかし、高学年になるほど理解度は低下傾向を示した。また、実習後は各学年において90%以上が「これからはがんばって歯を磨こうと思う」と回答した。

【考察】今回真砂小学校でのヘルスプロモーションを展開するにあたり、プリシード・パートの分析に関し、教育・組織診断の段階でKJ法、BS法を用いることで従来見えにくかった問題の抽出に成功したが、4・5年生の理解度が2年生に比べて低かったのは、内容がやや難しくなったためと思われる。全体的に児童の口腔内に対する意識が向上したのは、単に磨き方だけの指導に止まらず、講話により歯みがきの必要性を考える機会を与えたことが有効であったと思われる。以上のことから、今回策定した歯科保健指導方法は、児童の口腔内に対する意識・理解を高める上で、従来の一方的な指導と比較し効果的であると示唆された。

## 12 スケーリング実習における学生の自己評価と指導上の課題

○和田麻衣子, 本間 和代, 幸田 奈美

(歯科衛生士学科)

【目的】実習終了後に学生が自己評価を行うことは、学生自身が到達度を把握するうえで、また指導者が学生の理解度や個人差を知るうえで有効であると考えられる。そこで、スケーリング実習終了後に行った自己評価を分析し、検討した。

【対象および方法】①対象：歯科衛生士学科平成17年度生122名②方法：スケーリングのマネキン実習後、14項目の到達目標に対して4段階自己評価（A：自分でできたB：少し指導を受けたC：常に指導を受けたD：指導を受けてもできない）を行い、項目ごとに各段階の比率を求めた。さらに、122名中、臨床実習においても歯石除去実習の自己評価を行うことができた23名について、マネキン実習と臨床実習の比較を行った。

【結果および考察】マネキン実習後の自己評価では上顎前歯唇側が63.1%、下顎前歯唇側が46.7%、下顎左側臼歯部舌側が43.4%と、直視しやすい部位においてA：自分でできた（以下、A）と答えた者が多かった。また、

臨床実習との対比ができた23名においては、マネキン実習では、上顎前歯唇側が60.9%、下顎前歯唇側が34.8%、下顎左側臼歯部舌側が43.5%と、直視しやすい部位においてAと答えた者が多かったが、臨床実習ではAと答えた者は前歯部においては変わらず高い値を示したものの、下顎左側臼歯部舌側では8.7%、その他直視可能部位においても10%前後とマネキン実習に比べ低い値を示した。その要因として、マネキン実習では体験できなかった口唇や舌の力等が大きく関与していると考えられる。患者の口腔内でスケーリングを行うことで口唇・舌の排除をしながらのスケーリングの困難さや、直視したくてもできない術者の位置があることがわかったためと思われる。今後のマネキン実習において、口唇・舌の力を体得させる工夫や適切な術者の位置確保の指導を行う事が重要である。今後も学生の自己評価をもとに指導のポイントを明確にした効率的・効果的実習を進めていくことが重要であると思われる。